

第2部

演題 「雪舟筆“益田兼堯寿像”と益田兼堯」

講師 井上寛司

略歴

1941年 京都府生まれ

1968年 大阪大学大学院修士課程修了

現職 大阪工業大学情報科学部教授

中世史研究の代表的な研究者。主に中世山陰地域史の解明に取り組み、中世の遺跡保存にも尽力している。

益田家文書の研究にも携わり、益田市教育委員会発行の「益田家文書の語る中世の益田」シリーズ全3巻、『史料集益田兼見とその時代』、『史料集 益田兼堯とその時代』、『史料集 益田藤兼・元祥とその時代』を編集・執筆。

司会（城市）

さて、中国から帰国した後、益田を訪れた雪舟は、当時の益田家当主益田兼堯の肖像画を描きました。この肖像画の真筆は、ただいま「特別展」を行っています雪舟の郷記念館でご覧いただけますが、今日は、記念講演の第2部といたしまして、「雪舟筆“益田兼堯寿像”と益田兼堯」と題し、大阪工業大学教授井上寛司先生にご講演をいただきます。

井上先生は、1941年のお生まれで、大阪大学大学院博士課程を修了され、島根大学で教鞭を執っておられたことでもあります。ご専門は、山陰の中世史で、益田家文書の解読や史料集の執筆編集にもご尽力をいただきました。

それでは、井上先生よろしくお願いたします。

井上寛司・大阪工業大学情報科学部教授

井上でございます。許先生の方から大変充実したお話を聞かせていただきまして、大変勉強になりました。私は、雪舟のことを特に詳しく勉強したわけではございませんので、今日どのような話をすべきなのか、ちょっと迷っていたところでございます。今、ご紹介いただきましたように、この間、益田市の方で益田氏に関わる古文書ということで、益田家文書というのがございますけれども、現在、東京大学の史料編纂所が所蔵しています益田家に伝わった文書でございまして、それを地元の皆さんに分かっていただけるように紹介しようということで、史料集「益田家文書の語る中世の益田」を作ったのでございますが、その編集の責任を取られまして刊行いたしました。その中に、後から又ご覧いただくかと思いますが、今そこに掛かっております益田兼堯寿像も入れまして、なぜこういう物を作ったかという説明文（賛）の解読をいたしまして、若干説明を加えたという経過がございます。そういうことで、雪舟に関わるお話をするようにということになったのだと

思います。ただ、許先生もおっしゃいましたけれども、中国においてもそのようでございますが、日本においても、雪舟の足跡と申しましうか、彼の行った業績は様々な画として残ってはいますが、彼の生い立ちや、彼がどういうふうな経過の中で、どう仕事をしたのか、どういう活動を行ったのか、という具体的な歴史の中身については、良く分からないわけでございます。雪舟と益田との関係につきましても、現在、学会では雪舟が益田に来たということ自体、認められていないのが現状でございます。というのは、雪舟が益田に来たということを示す明確な証拠がないということがありまして、確かに、そう言われますと雪舟庭園があるじゃないかといろいろ言うんだけれども、確かな文献でもって雪舟が益田に来たということを証明するのは、なかなか難しいわけでございます。そういうことで、雪舟の前半生もよく分からないと言われてますし、先ほどの市長さん、町長さんのお話の中で、雪舟がどこで亡くなったかということについては、いくつか話があって、益田にも医光寺の住職として死んだという話もございまして、それも事実ではないともいわれ、いろいろな話が飛び交っています。飛び交うというのは、各地に伝承があるわけで、それを決める決め手がなかなか見つからないということでもあるわけです。そういう点では、まだまだ雪舟についてはよく分からないのが現状でございます。私も益田家文書に関わる限りで、いくつか調査もしてみましたけれども、十分な理解を得られないというのが現状でございます。従いまして、今日この場で、許先生に並ぶ形でお話しを申し上げるのは大変申し訳ないという気もいたしますが、そうは申しましても、少なくとも益田に関しては、益田兼堯の画が描かれたのは間違いない事実でございます。雪舟と益田との関わりは、この画において確かでございますので、一体それがどういうことなのか、どういうふうな背景の中で考えられるのかということをお話しをするという形で、今日の責めを塞ぎたいと考える次第でございます。

お手元にレジメをお渡しいたしました。長い文章を付けておりますが、要するに、今日お話しするのは、雪舟が益田氏と関係を持ちましたのが、その仲立ちである大内氏との関係にあるということでございます。この大内氏と益田氏は、大変深い関係を持っておりまして、雪舟が活躍した大内政弘の時代の益田家当主は兼堯でございますが、益田兼堯と大内政弘とはとりわけ深い関係を持っております。その関係を探る中で、雪舟との関係を考えるという形で問題を立ててみたいと思うわけでありまして、時間が制約されておりますので、雪舟が描きました益田兼堯寿像そのものについては、不十分ではございますが、史料集の中で少し書いておりますので、今日は述べないことにいたします。ただ、書きましたことをその後いろいろ考えてみまして、いくつか修正しなければいけないと思っております。そういうことも含めまして、地元の皆さんで史料集を読まれた方もあろうかと思いますが、若干書いたこととは違うこともお話しをしたいと思いますので、お許しをいただきたいと思っております。

レジメに書きましたように、そもそも益田氏というのは、この益田という地域に拠点を置いていた中世の領主のことでございます。その益田氏について詳しくお話する時間はご

ざいませので、今日は、益田兼堯という人物が益田氏の中で、とりわけ大内氏との関係において、どういう位置を占めたのかということが1つ、兼堯という人物の人となり、及びその時代がどんな時代であったのかということが2つ、そして3つ目に、益田兼堯や益田地域と雪舟とがどういう関係を持ったのか、この3つの問題について少しお話を申し上げるといって進めさせていただきたいと思ひます。

レジメの、「益田氏の歴史の中における益田兼堯 - 特に大内氏との関係を中心に - 」ということで、まず前提の話をおし上げます。大内氏はご存知のように、山口、周防国の守護でございました。もう少し前、平安時代からは、周防国の国府の役人、在庁官人と申しますが、その国府の役人の筆頭でございました。実は、益田氏も石見国の在庁官人の筆頭で、元を辿りますと、大変よく似た特徴を持っていたわけでございます。その大内氏と益田氏が直接関係を持つようになったのは、南北朝の時代でございます。先ほどの話に出てまいりましたけれど、小京都と言われる今日の山口の基礎を作った大内弘世という人物がおります。この大内弘世が、大内氏としては初めて石見国の守護に任じられます。その時の益田氏の当主は益田兼見と申します。この益田兼見と大内弘世との関係が、益田氏と大内氏との直接的な関係の最初でございます。貞治5年(1366年)のことです。この年に、大内氏が石見の国の守護に任じられまして、石見と関係を持ち、そして、益田氏と関係を持ったというわけでございます。その後、天文20年(1551年)、大内義隆が陶晴賢のクーデターにあいまして亡くなり、その後、大友氏から招かれました晴英というのがございましたけれども、これも毛利に討たれまして、大内氏が滅亡するのが16世紀中頃でございます。この間、つまり南北朝期の貞治5年(1366年)から、戦国期の弘治3年(1557年)に大内氏が滅ぶまでの間を、益田氏との関係を中心に整理いたしますと、およそ3つの時期に分けて理解することが出来るわけでございます。レジメに、第1期、第2期、第3期と書きましたように、第1期というのは、大内氏が、守護になりました貞治5年(1366年)から、後に和泉国の守護に任じられ、やがて幕府と対立しまして、一時勢力を大きく失うということがありました。これが応永6年(1399年)の応永の乱でございます。この時に、それまで待っていた石見国の守護職を没収されまして、ここで一旦途切れる。ここまでが第1期でございます。ただしこの間は、大内氏の内部でも、実は大内弘世とその息子盛弘との間で対立があり、大内氏も決して盤石ではありません。お父さんの弘世の方と益田氏が結びついて、盛弘が益田を攻めるなどという話もあって、決して安定した関係ではなかったわけでありまして。しかし、そうは言ひましても、大内氏がこの間ずっと石見の守護であったわけでもありません。この南北朝の時代というのは、どこの国でも守護がころころと入れ替わる時代でございます。石見の場合も大内氏から荒川氏、そしてまた大内氏というふうには、何度も交替した時代であります。こうして大内氏と益田氏との関係が次第に定着する時代、これが第1期でございます。後から申しますように、この時期は、益田氏にとっても大変大事な時期でございます。

第2期というのは、応永6年(1399年)に大内氏が石見国の守護職を没収されまし

て、やがて、再び石見の守護になる永正14年(1517年)までです。この間およそ100年余りというのは、大内氏が石見の守護ではなかったわけではありますが、その間、邇摩郡という、今日、銀山で有名な大田市の西の方でございますけれども、この辺を邇摩郡と申しまして、この邇摩郡だけを大内氏が持っている。分郡と申しまして、石見には6つの郡がありまして、そのうちの1つの郡だけ、つまり、石見のほぼ中心部ですが、その邇摩郡だけを大内氏が持っていて、残りは山名氏が支配していました。同じように、安芸の国でもそうでありまして、安芸の国の東西条という一部分だけを大内氏が持って、残りは山名氏が守護であり、さらに、そのうちの一部は武田氏が守護である。安芸はもっとややこしいんでありますけれども、そういう形で、石見の一部分だけを持っているという時代です。それが、16世紀のはじめ、永正14年(1517年)にもう一度石見全体の守護職に任じられるというわけで、それまでの邇摩郡だけと関係を持った時代、これが第2期でございます。ところが、実は、この第2期も2つの時期に分かれるのでありまして、その分かれ目が、応仁・文明の乱という時代でございます。雪舟が中国に渡ったのは、応仁元年(1467年)であります。先ほど、応仁2年(1468年)到北京に移ったという話がございましたけれども、ちょうど日本で戦国の争乱が始まったその年に、雪舟は中国に渡っているわけでございます。大内氏は、その時、西軍の中心的な人物であ、いわば応仁・文明の乱を取り仕切っている面がございまして、大内氏が京都を引き上げますと、応仁・文明の乱も終わってしまうという、こういった重要な地位を占めたのでございますが、この応仁・文明の乱を境にしまして、2つの時期に分かれます。どう分けるかと申しますと、その前後を通じて、大内氏は、邇摩郡を持っているだけで、実際の守護は山名氏です。ところが、応仁・文明の乱を過ぎますと、名目上は山名氏が守護なんだけれども、実際は、山名氏に替わって大内氏が石見国を支配するという、こういうことが起こったわけでありまして。なぜなのか。実は益田氏がいたからなのであります。そこに益田氏と大内氏との深い関係があった。それが兼堯だということでありまして。これが第2期です。

第3期は、永正14年(1517年)に、大内氏が再び石見の国の守護に任じられてから滅びるまででございます。この時期は大内氏が、当初は大内義興、そして義隆という、大内氏では最も栄えた時代であります。その義興の息子義隆の頃から次第に衰退に向い、やがて、家臣陶晴賢のクーデターがありまして、腹を切って死ぬということになるわけです。実は、そのクーデターの時に、益田氏は、陶氏と手を汲みまして、大内氏を討つために動いているのです。こういった複雑な関係があるわけで、大内氏と益田氏との関係は大変深いだけけれども、微妙なものもあるということでありまして。

レジメの2ページに移ります。以上のことを益田氏の側から整理いたします。今言った3つの時期は、それぞれ益田氏にとっても非常に大事な時代にあたっております。第1期というのは、南北朝期に益田氏の基礎を築いたと言われる益田兼見という人物が活躍した時代であります。これは、今日、七尾城だとか三宅恩土居だとか、益田の歴史を語る上で

は欠かすことのできない益田氏関係の遺跡が集中して残されている地域がございますが、この旧益田地域の骨格を築いたのが、兼見という人物であります。今日の益田の基礎を築いた人物、これが兼見でありまして、それが第1期にあたります。そして、応仁・文明の乱を挟む大変大きな激動の時代、これが兼堯の時代であり、第2期にあたります。そして大内氏が滅ぶ時代、大内氏滅亡の一翼を担うと同時に、大内氏が滅んだものですから、今度は毛利氏に服属いたしまして、毛利氏の永代家老として山口県に移っていくという、こういう時代が第3期であります。特に、その前半を担ったのが藤兼という人物であります。先ほど少し申しました史料集「益田家文書の語る中世の益田」というのは、この3人の人物の視点に合わせまして、『益田兼見とその時代』、『益田兼堯とその時代』、『益田藤兼・元祥とその時代』という3冊にまとめたわけでございます。従って、今日は、第2冊目に関わる場所をお話しするということになります。

さて、今申しました3つの時期を、もう少し踏み込んで益田氏の側から整理するとどういうことになるか。第1期では、大内氏が石見国の守護になりました。当時、益田氏にはいろいろな問題がありまして、詳しいことは省略いたしますが、益田氏を復興しなければならぬ、地盤をもう一度固め直さなければいけないという時代であったわけであります。鎌倉時代の終わり頃に、石見国の守護は北条氏でございました。北条氏が、この日本海沿岸部をずっと押さえていまして、守護職を集中的に独占いたしますけれども、石見もそうでありまして、益田氏もその北条氏に干されまして、本領を没収されるという非常に厳しい状況に置かれていました。それを復興するというのが、兼見に課せられた課題であったわけですね。南北朝の内乱を通じまして、兼見は、そのために大内氏と手を結びました。大内弘世とか、後には仲直りしまして盛弘とも手を結びまして、ようやくその後の益田氏発展の基礎を築いたわけですね。具体的に申しますと、室町幕府から益田氏の本領を安堵されまして、所領支配の基礎を固める。あるいは、福屋氏とか三隅氏とか周布氏とか、益田氏の一族がこの石見国にはたくさんいるのでありますが、それらに対するいわば惣領としての地位を認めてもらう。こういう意味で、石見国の中で益田氏が安定した地位を築いた時代が第1期であります。その時に、大内氏と結びつき、大内氏との関係や、その保護は大変重要なものがありました。つまり、大内氏があつて益田氏があつたと言っていいのです。そういう関係にあつたのが第1期であります。

第2期は、今度は、大内氏の側が石見の守護ではないわけでありまして。そういう点では、大内氏と益田氏との関係はかなり薄くなったのでありますけれども、今度は、逆に幕府との関係が強まりまして、益田兼堯の段階になりますと、室町幕府から直参として迎えられまして、直接、京都に上って行って正月参賀に参加するというようなこともありました。こういう時代であります。一方では、石見国の在地の領主、国人と申しますが、その国人達の団結と申しましょうか、一揆と言うんではありますけれども、一揆結合のいわば代表として石見国を取り仕切るという、こういう地位を占めたわけでありまして。こういういわば国人の代表と申しましょうか、連盟の盟主という地位を占めたというのは、実は、毛利氏と同じ

でありまして、毛利氏も安芸国の国人の盟主でありました。それが戦国大名になったわけで、そういう点では、益田氏が石見国の戦国大名になってもおかしくない。そういう地位を占めていたわけでありまして。逆に、そういう力を持っている益田氏が支えることによって、大内氏の石見国支配が可能になるという時代でもあったわけで、そういう転換が起こったのが、応仁・文明の乱であります。

第3期になりますと、大内氏が次第に衰退を迎える時期に入りました。そして、大内氏が滅亡いたします。天文20年(1551年)に大内義隆が死にました。天文24年(1555年)に厳島合戦がありまして、大内氏を討った陶氏が、今度は毛利氏に討たれます。その討たれた翌々年に、益田氏は毛利氏に服属して、あっと言う間に変心をいたしまして、大内氏から毛利氏へ鞍替えしているわけでありまして。こういう経過をざっと整理いたしますと、最初は、大内氏のおかげで益田氏は地位を安定させた。やがて、力を持ってくると、最後は大内氏をつぶすために走り回って、最後は毛利に付くという、大変薄情だと、良くは受けられない面もあるわけでありまして。しかし、それは一つの見方ではあっても、皮相な見方だろうと思うわけでありまして。実は、その間に益田氏自身が歩んだ歴史がありまして、益田氏の歩みの中で、大内氏との関係は刻々と変わっていくわけでありまして。先ほど申し上げました、1期、2期、3期というのは、いわば結論だけを申し上げたわけで、益田氏と大内氏との関係の最大の転換点は、兼堯の時代にあります。その兼堯の活動した時代の一番中心が応仁・文明の乱であり、そして、その時代に雪舟との関係もあるという、いくつかがだぶり合っている時代だということで、そこに焦点を据えてお話ししようと思うわけでありまして。

レジメの、「益田兼堯の人と時代」について。この兼堯という人物、実は何年生まれなのかよく分かりません。系図にも何年生まれか書いてありません。何歳で死んだかも書いてないわけでありまして、いろいろな説があり、雪舟と同年だという意見もあります。応永27年(1420年)に雪舟は生まれております。私は、雪舟より兼堯は3つぐらい年下ではないかと思っております。何故そう考えるかと申しますと、兼堯という名前、これは、当時の石見守護であった山名氏からもらったものでありますけれど、こういう名前をもらうというのは、普通成人式、元服するときであります。元服は、当時いくつかの場合によって違うこともありますが、一般的には、15歳と考えるのが普通でありまして(13歳、あるいはそれ以下という場合もあります)兼堯と名乗ったのが永享9年(1437年)でございますので、それから数えてこういうふうに推定しているわけでありまして。ただし、この推定は、あくまで一般論であって、どこまで言えるかわかりません。従って分からないというのが本当のところでありまして、一応の目安として、応永30年(1423年)生まれというふうに推定してお話ししていきたいと思っております。兼堯が応永30年(1423年)生れといたしますと、雪舟より3つ年下ということになります。雪舟は、大変長生きしたわけでありましてけれど、兼堯は、それに比べますと30年近く早く死んでおります。63歳で死んだことになります。さて、その兼堯がどういう生い立ちをだっ

か。彼は波瀾万丈の人生を送っているわけです。年表をレジメにあげておきましてけれども、永享7年(1435年)という年に戦乱がありまして、お父さんでありました兼理と、本来はその嫡男であった藤次郎という人物と一緒に九州に出陣し、そこで戦死してしまいます。惣領である当主と、その跡を継ぐことを予定されていた嫡子が同時に死んだ。これは益田氏にとって大変な危機であります。というわけで、急遽、その弟、次男坊で家を継ぐことなど元々考えてもいなかった孫次郎は、当時はまだ子供で、元服前ですから、松寿丸と名乗っておりました。何とか丸というのは、子供の時に名乗る名前でありまして、幼名と申します。その松寿丸が、わずか13歳で家督を継ぐことになったわけです。これは大変な危機でありまして、一族は105名ほどが連名で署名、血判をいたしまして、この新しい当主、松寿丸を惣領と仰いで一致団結し、益田氏のために頑張るといような起請文を立てたりいたしました。こういう大変な状況の中で松寿丸(兼堯)は家督を継いだわけでありまして、そして、15歳で元服いたしましたして、兼堯と名乗ります。翌年、当時の將軍は足利義教という人物であります。將軍から所領を安堵されまして、これによって、正式に、幕府の承認を得て益田氏の地位も安定したわけでありまして。ところが、その3年後の嘉吉元年(1441年)、兼堯がまだ19歳の年に將軍義教が殺されるという嘉吉の乱が起こります。この嘉吉の乱というのは戦国時代の幕開けを記す出来事でありまして、大変大きな激動が始まったわけでありまして。まさにそういう激動の時代だった26歳の時に、「左馬助」に任じられました。そして長祿2年(1458年)には、今度は、將軍義政への正月参賀に出向くということで、初めて幕府に出陣いたします。36歳の頃だと推定されます。次いで、レジメの3ページに移りますが、応仁元年(1467年)、働き盛りの45歳の時に、応仁・文明の乱が勃発するわけでありまして。『海東諸国紀』という朝鮮側で記された史料によりまして、この年に、朝鮮に益田兼堯が使者を遣わしているということもあるわけですね。2年後の文明元年(1469年)、47歳で、先ほど雪舟が日本に帰った年というお話がありましたが、この年に、兼堯の嫡子でありました貞兼を、大内氏がおりました西軍方の軍勢として京都に派遣いたします。この時期、兼堯はずっと益田におりまして、応仁元年(1467年)の段階から、東軍方つまり將軍足利義政の方からは、応仁・文明の乱が始まったから直ちに出陣せよという命令が何度も来ているのでありますが、それは聞かないふりをしまして、ほうかむりをしたまま自分の動きを考えているわけですね。そして文明元年に、義政の命に反しまして、西軍方の將軍であります義視(義政の弟)の命を受けまして、貞兼を京都に出陣させるわけでありまして。かねてから、東軍方の將軍から命があったわけですねけれども、動かないでいて、一方で裏で動いているわけですね。どういこうかと申しますと、大内政弘は早くから京都に出陣していきまして、陶弘護がその留守を預かっていました。この陶弘護というのは、兼堯の娘婿にあたります。つまり兼堯の舅なのです。この大内氏の後を預かっている陶弘護と相談いたします。応仁・文明の乱というのは京都で行われている戦乱でございますけれども、地元には地元の理屈があるわけですね、彼らは、この地域の中で問題を立てなきゃいけないということで、独自に相談をいた

しまして、そのことを守護である大内政弘にも了解させるという、実に手の込んだことをやるわけです。この陶弘護と相談いたしまして、政弘の一味として本意を達成する、という約束をいたします。つまり、西軍方の中心的な人物として京都に出向いている大内政弘、その大内政弘の一味として動くということです。そうして本意を達成すると言いながら、自分は東軍方なんです。実にややこしい話しでありまして、天下って真っ2つに別れている中で、地域は地域の論理で動いているわけです。京都の方では、東軍、西軍と言ってやっている。九州と東北地方を除く日本列島全体が、東軍だ西軍だともみ合いをやっているわけでありまして、この石見の地では、そうでなく、東軍西軍関係なしに自分達は自分達でやろうという話であります。そういうことを何度も約束するわけです。こうした状況の中で、やがて東軍方の義政の側から文明2年(1470年)に仕掛けが起こります。大内政弘の叔父にあたり、仏門に入りまして道頓と名乗った人物がいますが、この道頓に反乱を起こさせます。大内政弘の足元を崩そうというわけです。この大内道頓の乱は、地元にも大きな衝撃を与えることとなります。道頓の乱が起こった時、石見の国人たちは一斉に東軍方、つまり道頓方に付くわけでありまして。こうなりますと、益田に残っている兼堯としまして、いつまでも俺は知らんと言ってられないわけでありまして、自分は一応東軍方だということで名代を派遣しまして、初めて東軍方であるという旗幟を鮮明にするわけです。それまでは、4年間じっと旗幟を鮮明にせず、裏で画策しながら、どうするかを練っていたわけでありまして。翌文明3年(1471年)になりますと、この乱が混乱をきたすということで、急遽、京都から兼堯の嫡子であります貞兼が、大内政弘の命を帯びまして石見に戻り、陶弘護らと協力いたしまして、道頓らを鎮圧するということが行われます。元々これは、幕府内部の対立から仕掛けられた出来事でありまして、大内道頓そのものはそんなに問題ではない。問題は、国人達がどう動くかでありまして。大内道頓の乱そのものは鎮圧されましたが、石見の国人は依然として東軍方で、嫡子貞兼は西軍方で動いているわけです。これでいいますと、石見に帰ってきた貞兼は孤立をされていて、大変まずいことになるわけです。そこで、弘護と話しをしまして、また契約を結びます。貞兼が、地域の状況の中で東軍方に付くのはやむを得ないが、しかし、その場合であっても、かつての約束は忘れない。西軍方である政弘との関係、あるいは弘護との関係はちゃんと堅持するという約束をいたします。そこで、貞兼は東軍方に寝返るわけです。服属して直ちに、東軍方の将軍である義政から所領安堵を受けます。それが文明4年(1472年)です。東軍方の将軍から所領を安堵されると、兼堯はまだ50歳だと思われませんが、隠居して「越中守」に任じられます。隠居したのが文明4年で、50歳早々ですから、まだまだ活躍できるはずでありますけれども、家督は息子貞兼に譲って、自分は悠々自適の生活をする。もちろん、この後も幕府との関係はずっと維持しておりまして、幕府とのやりとりや、幕府からやってくる使者の接待とか、そういう公式の場では、兼堯がずっと動いているわけです。あるいは、石見の国人との関係においても、絶えず貞兼と連名で出てくる。そういった点では、益田氏全体に対し、裏で貢献すると申しませうか、

あるいは裏で支える。裏方になり、息子である貞兼を表に立てながら、益田氏あるいは石見国を治めると申しませうか、そういう位置にあって、一方では隠居生活を楽しむというのが、文明4年以降の兼堯の生活だった考えられます。文明6年(1474年)その2年後であります、東軍方の幕府から石見の国人に対して、三隅、福屋、佐波、小笠原氏らの、石見を代表する国人達であります、益田氏に協力するよという命が下されます。つまり、幕府のお墨付きを得たわけであります。石見の国人たちの中の誰がリーダーかという、益田氏だということだす。幕府がお墨付きを与えまして、益田氏が石見の国人の代表であるという地位が確立したわけであります。この頃になりますと、応仁・文明の乱と申しませしても京都は焼野原になってしまっていて、公家なども全国の各地に逃げ回っている状況であります。そうした中で、文明9年(1477年)に大内政弘が京都を引き上げます。周防、長門をはじめとする足元が、次第に危なくなってきたからだす。大内氏が京都を引き上げると同時に、応仁・文明の乱そのものも終わってしまうという、実にあっけない話でありました。そしてそれから後は、それこそ本格的に、各地域毎に、いわゆる戦国大名の誕生に向けて動き始める。大内氏も今度は周防や長門などをどう押さえるのか、という形で動き始める時代であります。政弘が帰った文明9年(1477年)から2年後の文明11年(1479年)に、雪舟が描きました「兼堯寿像」に竹心周鼎が賛を書くわけであります。そして、それから6年後の同17年(1485年)に、兼堯は没することになります。

以上、ざっと兼堯の時代、あるいは彼がここで何をしたのかということを見てきたが、もう一度整理いたしますと、こういうことになるだろうと思います。彼は、晴天霹靂と申しませうか、わずか13歳で家督を継がなきゃいけない。そういった大変危機的な状況にありました。当時の具体的な状況はよく分かりませんけれども、その後の経過をみますと、兼堯は大変順調にと申しませうか、非常にうまく益田氏をまとめていったと推定されます。穏やかな時代だすとそうでもないでしょうけれども、嘉吉の乱から応仁・文明の乱という、日本全体が大変な激動の時代にあたっている、まさにその時期に、自分はどうやって生きていくのか、どうやって益田氏を守っていくのかという判断を迫られているわけだす。もちろん、家臣の色々な知恵もあつたでしょうけれども、何と言つても当主がどう判断するか、これが決め手であります。そういう点では、20歳になるかならないかの時に、日本がこれからどうなるかということを見通しながら、自分が生き抜く道を定めたというわけでありますから、大変優れた能力を持っていたのは間違いないと思います。彼が行つた事柄の中身から申しませすと、実にすごい人物だと、舌を巻かざるを得ないわけであります。いわゆる応仁・文明の乱を含めたこの時代というのはどういう時代なのか、一体どういう問題があつて、何がこういう混乱を起こしているのか、それは今後どう動いていくのか、こういうことについての見通しを求められているわけだす。そして、我々は絶えず日常そうでありますけれど、自分の置かれた状況がなぜそういうことになっているのか、その原因をつかみ、これを除去しながら未来への展望を見出し、その方向を切り

開く。その努力がいかんによって未来は様々に変わってきますけれども、我々の置かれている状況については、客観的な分析、現状分析をしなければ未来が見えてこないのは、言うまでもないことであります。今日から見ますと、嘉吉の乱から応仁・文明の乱といえますのは、こういう流れなんだと大体分かりますけれども、その中に生きている人間が、この時代は何なのかを見極めて、どう動くのかを判断するという事は、大変なことだと思います。その時代に、日本の現状を見据え、未来を見据え、いかにして益田氏を再建するかということを考えてわけです。今日、お集まりの町長さんとか議長さん、そういう舵取りを任されるお立場でよく経験されることだろうと思うんですけれども、大変困難を伴う問題であります。だから、兼堯が一体何を考えたかを知ろうと思いますと、当然ながら、彼が生きた時代とは何であったのかを、分かった上で議論しなくてはならないわけですね。結論的にいって、彼は大変な高等戦術を用いるのであります。それがなぜ高等戦術なのかということは、その時代を見れば分かるのであります。あまり詳しいことを述べる余裕はありませんけれども、最低のことだけを申し上げます。

レジメ3ページの4。この嘉吉の乱から応仁・文明の乱に至る過程というのは、要するに、室町幕府を中心としたこれまでの政治システムが崩壊する時代、転換点にあっているわけですね。この時期の国家システム、あるいは政治支配システムというのは、室町幕府守護体制といわれるものであります。それはどういうことかと申しますと、各地にそれぞれ大きな力を持つ守護という大名がおりまして、中央にいる将軍、将軍というのは、いわば大名を如何に統制しながら、全国的に支配するのかを考え、各地の守護は、それぞれの自分の地域の中でどう支配するのかを考える、この将軍と守護が綱引きをやっているわけですね。結論的には、将軍を中心として、守護がまとまって全体を支配している。これが室町幕府守護体制であります。そこでは、絶えず、将軍が守護を押し込んでしまおうとする力と、逆に、守護が自立して後の戦国大名になってしまおうとする集中と分散の力が働いています。この2つがうまく微妙なバランスを保っているのが室町時代という時代であります。その時代に、将軍は、次第に、そういう守護を押し込んで何とか自分が権力を強化しようという方向を示してまいります。当時の守護も結局その将軍だとか室町幕府とかに結びつかないと自分の地域支配を十分できない。地域には益田氏のような国人が一杯いるわけですね。そういう有力者を押さえようと思うと、将軍や幕府の権威がなければ支配できないという事情がございます。将軍と大名が手を結んで全国支配をしているわけですね。そのために、将軍は、各守護に京都にいることを命じまして、守護は、京都にいて将軍と一緒に地域を支配し、各国には守護代がいて支配をする。これが本来の室町幕府守護体制でした。しかし、将軍としては、もっと守護を押し込んで、自分が権力を握ってより権力の安定を図りたいということで、特にそういうことを強力に推進したのが、義教の時代からであります。将軍直属の軍事力を強化しまして、守護を押し込み、あるいは守護家の家督の争いに口を挟み、片っ端から守護家をつぶしていく。こうして、将軍の力を拡大しようという動きを示した。これが、この時代の1つの大きな流れでありました。しか

し、将軍が力を持つてくるのに伴って、逆に政治そのものが次第に矛盾をかかえてきます。日野家をはじめとする公家だとか、あるいは将軍の取り巻き連中、日野家というのは元々将軍の奥さんを出す家で、日野富子というのは、日野家から出て将軍義政の奥さんになるんですけれど、そういう奥さんだとかそういう連中が、次第に力を持って政治を動かすという、政治の私物化が起こってくるわけです。このように、次第に政治そのものが腐敗し、混乱するというのもこの時代の特徴であります。そういう問題が一挙に吹き出したのが嘉吉の乱、つまり守護が将軍を殺すという出来事です。そして、その中で力を持ってきた細川氏と山名氏によって政権内部が分断されてしまい、やがて、東軍である細川氏、西軍である山名氏、この2つががっぷり組み合せて戦争を引き起こすというのが応仁・文明の乱であります。そのきっかけは、将軍家の内紛だとか、それを支えるべき管領であった、畠山、斯波などの家督争いから起こったのでありますけれども、要は、そういう政治の混迷の中で力を持ってきた守護大名の代表である細川氏と山名氏が、勢力を分け合って対立するということから起こったわけでありまして、まさにこれは、将軍の権威失墜でありまして、こうして、応仁・文明の乱は起こったわけでありまして。このように、この時代の流れの1つは、将軍が次第に力を持って専制的な支配を強めてくるということにあります。そしてその1つの現われが、守護を押さえるために、将軍が守護の下にいる国人を直接 まえるという動きです。先ほど年表の中で申しましたけれども、兼堯が直参に任命され、将軍義政にはじめて謁見するという話がありました。こういう石見国の中で大きな力をもっている益田氏などを直接将軍が んで、石見国に対する支配を強める。これは、将軍が、次第に地域に対する支配権を強化しようとした動きの現われであります。だから、益田氏が将軍と直接つながって、石見の中で大きな地位を占めていくという動きも出てまいります。そういう点で、将軍との関係を無視することができない。将軍との関係は大事にしなきゃいけないというのが、1つの流れであります。もう1つ、しかし1方では、今言った応仁・文明の乱が起こったことから分かりますように、守護が将軍を殺す、そして応仁・文明の乱が起こりますと、守護は京都にいないで、それぞれみんな自分の領国に帰っていきます。守護が、それぞれ自分の力でもって地域に対する支配権を拡大しようとしみます。つまり、守護が中心となって地域支配を行うという方向に動いていく。その行き着く先が戦国大名でありますけれども、こういう戦国大名への道が、もう1つの道であります。しかし、さらにもう1つあります。それは、先ほど申しましたように、石見は特にそうでありますけれども、国人がどう動くかという問題です。中央や地方の政治支配システムが不安定になってきますと、国人達はお互い手を組み、一揆を結んで自分達で地域支配システムを守ろうとします。こういう国人の一揆が、次第に強まってくるというのもこの時代の1つの大きな流れであります。要するに、この時代には3つの流れがあったわけです。1つは、将軍が次第に力を強めて、政治支配システムを再編成しようとする動き、いま1つは、それに対抗して将軍が次第に力を強めてやがて戦国大名へと進んでいくような動き、そしてもう1つは、その間にあって国人がお互いに手を結んで、どっちへ動くかということをお互いに手

分達で考える。この3つの流れです。石見においても、この3つの流れが渦巻いているわけであります。そこでは、一体何が基本であって、それらがどう関連し合いながら今後へつながっていくのか、見通しをつけなければなりません。まさに、その判断を求められていたわけです。その判断を応仁元年（1467年）から文明2年の間に兼堯が決断するわけです。実は、そんなに長くは時間をかけていなくて、応仁元年の段階ですでに結論は出ているんですけども、大内氏の留守を預かっている陶弘護と相談しながら方針を固めるんです。そしてその方針の上に立って、息子貞兼を京都に派遣する。こういうことをやったわけです。さて、もう一度そのところを、ややこしい話ですので、整理いたします。4ページの下の方に8というのがございます。兼堯は、これらの事態に対してどう対処したか。乱の勃発した当初、元々主従関係を持って直参に任じられていた義政、東軍方の将軍であります。その東軍方の将軍から何度もしきりに呼び出しがあります。東軍方に参加せよ、都に上ってこいという命があるわけです。それに対して、旗幟を鮮明にせずごまかすわけです。むにゃむにゃいって対応しない。これが1つ。その一方で、いち早く西軍方の守護大内政弘と結ぶ。西軍方の親玉は山名宗全でありますけれども、実際に西軍方を支えているのは大内政弘です。そういう点では西軍方の中心と言っていい大内政弘。周防、長門などの守護であると同時に、邇摩郡の分郡の守護でもあったわけであります。その政弘の留守を預かっているのが、陶弘護であります。陶弘護は、兼堯の娘婿ですけども、これと相談をしまして、政弘の一味として本意を達成することを申し合わせる。つまり、あくまで守護である大内氏と連携してこの時代を乗り切るんだという方針を定めているわけです。しかし、その守護は、実は西軍方なのです。自分は東軍方に属して命を受けているのだけれども、それをごまかしながら、西軍方である大内政弘と手を結んで乗り切るんだと、こういうふうにごまかしているわけです。そういう約束をして、それは弘護との間であったり、政弘にも承認させ、政弘も分かった、了解したという確約を取り付けた上で、改めて、この西軍方の将軍になった義視という義政の弟ですが、応仁2年（1468年）に将軍になっておまして、この正式のと申しましょうか、形式的に整った段階で、将軍の命を受けて、嫡子貞兼を西軍方として、京都の大内政弘の配下に派遣するわけであります。そういった点で、益田氏は大内政弘に従っていたのです。しかし、依然として兼堯は東軍方なんです。自分は動かないんですけども、東軍方には反対してない。何だかんだ言って延ばしているだけの話なんです。その間に、攪乱のために大内道頓が東軍方として蜂起するわけです。そして、石見、周防、長門あたりの国人が、それに動員されていくという状況があるわけで、石見の国人も一斉にこれに従う。史料がありませんからよく分かりませんが、基本的には、殆どすべての石見の有力な国人が東軍方に付くという状況の中で、兼堯もはじめて自分も東軍方だというふうに旗幟を鮮明にいたします。つまり、自分も国人と同じなんだというわけです。国人と同じ道を歩んでいるという形をもって、東軍方として、しかも、彼は名代を派遣します。名代を派遣するというのは非常に巧妙だと思うんですけども、そういうことをいたします。しかし、大内道頓の乱その

ものは、大内氏内部に関わる問題でありますから、東軍西軍とは違う次元の問題であります。というわけで、政弘は貞兼を現地に戻しまして、ただちにこれを討伐させた。政弘の命を受けた貞兼が京都から帰国し、陶弘護と協力しまして、道頓の乱を鎮圧するというわけであります。しかし、東軍方が優勢であることは依然変わらないことから、改めて陶弘護と協議をし、その承認を得た上で貞兼を東軍方に鞍替えさせる。そして、東軍方將軍義政から所領安堵を受ける。その上で貞兼に家督を相続して隠居をする。こういうことをやったわけであります。その上、今度は、東軍方將軍から承認を受けて家督を相続した貞兼に対し、將軍義政から石見の国人に対して貞兼に協力するという命がでる。これ以前、すでに益田氏は義政から直参として認められており、將軍との関係で、石見の中で直参として認められているのは益田氏だけです。その益田氏に協力せよと將軍から声がかかる。益田氏は、石見の国人の代表という地位を獲得するわけであります。そして、やがて、文明9年(1477年)になりますと、大内政弘が帰ってきます。そして、大内道頓の乱を押さえておりますから、石見を含めてこの地域では、全く大内氏に反抗できない。すでに山名氏は没落しておりますから、大内氏は飛ぶ鳥を落とす勢いでありまして、まさに大内政弘が、この地域全体を押さえる。その大内氏と益田氏は結んでいるわけです。つまり、將軍と結び、政弘と結び、そして国人の代表であるという、こういう地位を合わせ得たわけです。この兼堯がやったやり方と申しましうか、この応仁の乱の時にとった戦術は極めて巧妙で、今から見れば、ただ巧妙で済むかも知れませんが、刻々と動く情勢の中でこれをやってのけたのはすごいことだと、改めて感じるわけであります。

以上を整理しますと、こう言えるだろう。レジメの5ページ9。守護大内政弘との連携による実力を背景とした地域支配を基本と認め、これが時代の流れである、守護が戦国大名になっていくというのがこの時代の基本的な流れである、つまり、將軍が基本ではないんだとして、守護と結びつく。そういった、大内氏との連携が基本だという認識を踏まえて、大内政弘と結んで、今後の時代を乗り切っていくという基本線をまず引いているわけです。しかし、これだけではいけません。先ほど言ったように、將軍義政との関係、これも軽視できない。特に国人との関係でいうと、將軍との関係を抜きにしては、上手いかわからないわけでありまして、そういう点で、將軍義政との関係を重視しながら、これを梃子にして、石見の国人に対する指導的地位の確立を目指す。そして、そのために、陶弘護との連携を密にしながら、兼堯と貞兼は、東軍西軍両方に分れ、親父は東軍、息子は西軍というふうによく使い分けて、益田氏を守ろうとした。極めて高等な戦術だと思うわけです。

このように見てまいりますと、益田氏の戦術というのは、この石見地域はもちろんですけれども、大内道頓の乱を上手く押さえることもできたわけでありまして、大内氏にとって、益田氏との関係というのは、かつての南北朝期のように益田氏が大内氏の協力を得てというのではなく、むしろ、益田氏が主体的に政策を展開し、事態を解決していくという、益田兼堯の行動の中で大内氏が支えられている構造が見て取れるわけでありまして、そういう

点で、守護と国人という関係はありますけれども、基本的には、大内氏と益田氏はいわば相互に自立しながら支え合うという関係、これが基本であったと考えられます。

こういうわけで、石見における応仁・文明の乱が終わりますと、まだ文明9年までは、全国でも各地で戦乱が続いているわけですが、石見の場合はすでに文明4年(1472年)で終わってしまっているんです。文明4年で応仁・文明の乱は終わりました、その後の5年間というのは、要するに応仁・文明の乱の間なんだけれども、益田、あるいは石見は早々と平和が実現されているのです。雪舟が中国から帰ってきて、山口で雲谷庵を開いた頃の益田は、すでに平和なのです。日本中戦乱に明け暮れている状況の中です。これが、兼堯と雪舟との関係について考える際の1つの重要な前提であります。

そこでレジメの、「兼堯寿像と雪舟・益田兼堯」ということであります。私は、画のことはよく分からないんですけども、少なくとも益田兼堯についての人物像は持っています。その人物像、彼の生い立ちや行動様式を思い浮かべながらこの絵を観ますと、実に良く描けていると改めて思うわけです。画としての素晴らしさと申しまししょうか、線の太さ、力強さだとか、繊細さだとか、いろいろと美術の専門家が賞賛をしているところでありませぬけれども、私はむしろ、歴史的に捉えた兼堯像というものが、この雪舟の画とダブることによって、まさに生き生きと、逆にこの画から、彼の生きた時代と彼の生きざまがわかるという、そういうことを強く感ずるわけです。だから私は、画そのものはよく分かりませぬけれども、歴史の面から観ますと、大変良く描けていると感心するわけであります。やはりこうだったんだ、兼堯はこういう人物だったんだと思います。全然違和感がないんです。彼の生い立ちや生きざまというものが、非常にこの画とマッチをしている。そういう点で、非常に写実的だと思います。それが、おそらく雪舟のすごさなんだろうと思います。人物画というのは、基本的にその人の特徴をいかに捉え、表現しきるか、これが画家の最大のポイントだろうと思うんですが、そういう点で、私はこの画像に、大変親近感を感じる。兼堯とはこういう人物だったんだろうと、全く違和感がないんです。ここに描かれた兼堯は、そんなに都会人という感じはしません。どちらかというと、大変素朴な感じがするんですけども、しかし、その中に、彼が歩んで来た歴史と申しまししょうか、彼の人生が凝縮されているような気がいたします。こういう画を眺めておりますと、もちろん、雪舟が画家として優れていたから、兼堯の本質を見抜いて描いたんだというのが、一つの説明なんだろうと思うんですけども、それだけではないんじゃないか。もう少し奥があるんじゃないかと思うわけです。私は、雪舟というのは、単に兼堯を見て、兼堯の話を聞いて、それなりに知っていたというだけでは済まない。もっと、兼堯と親しい間柄、親密な関係にあったのではないかと考えざるを得ないわけであります。そういう点で、この画をどう評価するのかということを少し考えてみたいと思います。

先ほど申しましたように、兼堯は50歳で隠居しているわけです。家督は貞兼に譲って、自分はむしろ後見人として隠居生活をする。大雄庵と言う地名が今も残っておりますけれども、そこに住んだと言われています。兼堯には、彼が敷いた路線が、間違いなかったか

どうかを確かめる役目があったでしょうけれども、確信もあったでしょう。そういう点で、彼は大変ゆったりとした気持ちで過ごしただろう。それが晩年の十数年ではないかと思うわけです。この時代、つまり文明4年から彼が没する十数年間というのは、彼にとって悠々自適の生活であった。益田氏はもう揺るがないんです。実際、その後大きな問題は起こりません。貞兼の時代が一番安定しているんです。この後、問題が起こってきますのは、16世紀に入りまして、大内氏がもう一度守護に任じられた時に、前の守護であった山名氏が尼子氏に協力を求め、大内氏と対決するというをやったものですから、今度は、尼子・大内という戦国大名間の戦乱が始まります。こうなりますと、石見はまた、銀山の関係もありまして、尼子・大内が入り乱れた激しい対立が生じることになるわけです。しかしそれまでの間、とりわけ応仁・文明の乱以降は、比較的安定した時代であります。兼堯が死ぬまでというのは、石見では特に問題が起こっておりません。つまり、大変安定した、政治的にも社会的にも安定した時代の中に生きている。まさに、彼は悠々自適の生活を送ったのだと推測されるところであります。もう1つ、まだ文明4年頃というのは、全国的には応仁・文明の乱の真っ最中でありまして、だからこそ雪舟も雲谷庵を設けてみたり、大分に行ってみたり、転々としながら、自ら絵を描く場所を求めているわけです。さらにもう一つ注目されますのは、以前から言われていることですけれども、益田は、雪舟が住職として死んだといわれる医光寺とか、東光寺とかいわれるお寺があります。雪舟が住職だったというのには疑問がありますし、益田で死んだかどうかについても、私はあまり信頼できないと思っております。少なくとも、そういう東光寺、あるいは崇観寺、現在医光寺と言っているのは元々崇観寺というお寺で、益田氏の氏寺でございまして、それが後に現在の医光寺に切り替わるんでありますけれども、その益田氏の一番中心であった崇観寺、あるいは東光寺、現在大喜庵と言っているところでもありますけれども、その住職であった禅宗の僧侶勝剛長柔だとか、兼堯寿像に賛を書いた竹心周鼎などは、いずれも益田氏や大内氏の一族でありまして、彼らはいずれも京都の東福寺の僧として大変有名な人物であります。そして、いずれも、雪舟と大変近い関係にあった、知り合いであったと言われているんです。こういう人物が、東光寺の住職であると同時に崇観寺の住職でもあった。それから、そこへ桂庵玄樹だとかいろんな僧侶がやってくる。つまり、この文明年間、応仁・文明の乱が終わる前後の時期というのは、この益田の地に優れた禅僧がいて、そこをいろんな人が訪れてくるという大変昂揚した時代だったんです。その時代と、兼堯が悠々自適の生活を送っているのが重なっている。これは決して無関係ではない。兼堯が、こういう形で、自らの努力でもって、平和な世界を作って、そこに禅宗の僧侶を招き、歓談をする。当時の武将たちにとっての最大の教養というのは、連歌をしたり、禅僧と茶を飲んだり、あるいは歓談をしたり、そういうのが当時の文化人たるものの最大の教養で、そういうことがなされていた。こうした当時の益田地域の政治的、社会的状況や益田氏、益田兼堯の状況、それから、その当時の、現に賛を書いている竹心周鼎や、前住職であった勝剛長柔などの活動、あるいは他からも確認できますが、桂庵玄樹をはじめとするたくさんの方

僧が、この時期に益田を訪れている、等々のことを考えますと、いち早く戦乱の終わった益田に、中国から帰ってきた雪舟がやって来るということは、当然有り得たのではないかと考えられるわけです。そういう点では、文明5年に雲谷庵が築かれ、そこに拠点を構えてから、文明8年頃には大分へ行ったりもしますけれども、この間何度かにわたって、雪舟が益田を訪れた可能性は極めて高いのではないかと思うわけであります。

ところで、この画はいつ描かれたのかよくわからない。普通、賛というのは画が描かれた直後に書かれるものであります。しかし、この賛は実に奇妙なんです。この賛に何が書いてあるかと申しますと、中村信為という益田家の雑掌、益田家のいろいろなことを取り仕切る執事みたいなものですが、その中村氏が、土居庵という自分の庵を建てた時に、そこにこれを飾って毎日拝む。そして主君に対する忠愛を示したいということで依頼してきたので、竹心周鼎はそういう頼みならば、自分は、金は要らんとって書いたんだと、こう言ってるわけです。ここには、誰が雪舟に頼んでこの絵を描いてもらったのかまったく書いてないんです。ただ、ここには、前半の部分に兼堯がどういう人物なのか、先ほど大まかな歴史を辿りましたけれども、竹心周鼎は、兼堯には非常に徳があり、仁があって、教養に恵まれているとを書いて、その上で中村信為が、自分の庵にこれを飾って拝むために賛を書いて欲しいと言ってきたので、これを書いてやるんだという経過を書いているだけなんです。ですから、これまでは、中村信為が雪舟に頼んで描いてもらった、というふうに考えられてきました。しかし、これは考えにくい。益田家の雑掌でしかない、つまり執事である者が、雪舟に頼んで主君の画を描いてもらうというのは、一般的には考えがたいわけであります。また、もう一つには、益田兼堯が自ら山口に出向いて描いてもらったという説もあるんですけども、これも考えにくい。当時、益田兼堯はずっと益田にいます。隠居した後も、特に動いた形跡は認められません。そうすると、やはり雪舟が益田に来て画いたと考えざるを得ない。私は、史料集を書くとき、このことで大変苦しみました。文明11年(1479年)政弘が帰って来て2年後ということもありまして政弘が兼堯に対する謝礼の意味を込めて、雪舟を益田に遣わして描かせたんじゃないかという推定を試みたんですけども、それにしても、よく考えると落ち着かないんです。というわけで、私が今日考えてきましたのは、雪舟そのものが、何度か益田に来ているんじゃないか。その時、当然出迎えたのは兼堯であり、兼堯が頼んだのか、雪舟が自分で行ったのかははっきりしませんが、おそらく、色々お世話になってる返礼の意味もあって、雪舟が進んで兼堯の像を描いたのではないかと想像いたします。そしてその時は、落款だけがあって、もちろん賛も何もなし。そういう形で、兼堯が描いてもらった雪舟の像を持っていた。それを、後に中村信為が、どうしても欲しい、主君の像をいつまでも大事にしたいというふうに頼んできたものですから、下げ渡したのではないか。それが、文明11年ではないかと考えているわけです。こうして、雪舟真筆の像を買った中村信為が、喜び勇んで竹心周鼎に頼み、賛を書いてもらった。こういうことが推定出来るのではないかと考えるわけであります。さらにこの点に関しては、山水図の話もございますけれども、益田の当時の景

観というのも問題になるだろうと思います。時間がありませんから詳しくは申せませんが、でも、当時、東光寺は、海から見ると断崖になっておりました。現在は、益田川と高津川が完全に分かれてしまっておりますけれども、かつては合流しておりました、河口部がくっついてたんです。そういう点で言うと、今日の乙吉あたりまで海が入り込んでいる状況が中世の景観であります。つまり、海が入り込んで、その断崖の上に東光寺があるという景観であります。そのような中世の景観を思い合わせますと、先に述べた文化的・宗教的な状況をも含めて、雪舟は好んで益田を訪れ、中国を思い浮かべて画を描くということがあったのではないかと、思うわけです。そう考えますと、文明5年以降、何度かにわたって益田を訪れた雪舟が、ある機会に、おそらく隠居をして間もない頃かもしれませんがけれども、兼堯の画を描いて、その時には落款だけがあったのを、やがて中村信為が貰い受けて、文明11年に改めて賛を書いてもらった。こういうふうにと考えると、この画は読めるのではないかと、考えているところであります。しかし、これは状況証拠と申しますか、勝手な推測でございまして、残念ながら、一つも確たる証拠がない。一般に、雪舟について考える場合、一つには、画から、描かれた風景や景観等々から、足跡を辿るといいう方法がありますけれども、今一つには各地に残された伝承を含めて、断片的な史料から、彼の足跡を辿っていくというのが、唯一の方法だろうと思います。そういう点では様々な可能性を積み上げながら、もっとも論理整合的で可能性の高いのは何なのかを考えていかなければいけない。そういう一つの可能性として、こういうことも考えていいのではないだろうかという話であります。先ほどの許先生の話しに比べますと、まことに心もとない話でありまして、大変しっかりとした、困難な中にも蓄積のあるお話をされた許先生に対しまして、誠に申し訳ないんでありますけれども、兼堯の歴史や経過だけは間違いございませんので、兼堯という人物像を踏まえて、こういうことも考え得るんだということをご理解いただけたらありがたいと思います。以上でもって、私の話を終わらせていただきます。ご静聴、ありがとうございました。(拍手)

司会(城市)

井上先生、大変ありがとうございました。先生の今後のますますのご活躍を祈念いたしまして、今一度大きな拍手をお願い申し上げます。(拍手)

ただいまの井上先生の演題ともなりました、雪舟筆益田兼堯像の真筆は、10月1日から11日までと11月2日から14日まで、乙吉町の雪舟の郷記念館の「特別展」でご覧いただくことができます。明日10月3日は、「雪舟サミット」、「雪舟さんまつり」協賛ということで無料開放していますので、この際には是非お出かけください。また、幕の間にご紹介をさせていただきました「子供絵画展」と「現代日本画展」は、本日は6時まで公開をしておりますので、こちらの方も是非ご覧ください。

それでは、以上をもちまして第8回雪舟サミット開会行事並びに記念講演会を終了させていただきます。大変長時間にわたりお疲れ様でございました。お気を付けてお帰り下さい。

